

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 3 年 6 月 23 日現在

機関番号：12401

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2018～2020

課題番号：18K01529

研究課題名（和文）計算貨幣論をめぐる論争史：バーミンガム学派、マルクス学派、ポスト・ケインズ学派

研究課題名（英文）Historical debates of the money of account: Birmingham school, Marxian school and post-Keynesian school

研究代表者

結城 剛志 (Yuki, Tsuyoshi)

埼玉大学・人文社会科学部研究科・教授

研究者番号：40552823

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,400,000円

研究成果の概要（和文）：本研究の目的は、計算貨幣の論争史を通じた、現代貨幣論の体系的理解の提示である。研究成果は、(1)バーミンガム学派を基点とする計算貨幣論の学史的考察、(2)マルクス派およびポスト・ケインズ派による計算貨幣論の受容過程の解明、(3)現代の貨幣・金融制度の体系的理解の提示の3分野に沿って提出された。ポスト・ケインズ学派が信用貨幣を名目主義的に説明するのに対して、マルクス学派は価値形態論を通じた商品経済的論理を重視する点に特徴がある。バーミンガム学派の計算貨幣論も名目主義の系譜に分類されてきたが、エンダービーの計算貨幣は、むしろ商品価値や労働実体との関連性を問う独創的なものであることが明らかにされた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

現代の資本主義はグローバルに変容している。なかでも貨幣市場、貨幣制度、金融政策の変化は急速であるにもかかわらず、現代の貨幣を理解するための経済学的な分析枠組みは存在せず、経済学者の間で幅広い見解の相違が生じてしまっている。本研究は、19世紀に、金本位制・兌換銀行券制度への復帰に強硬に反対したバーミンガム学派の所説を中心にして、計算貨幣論をめぐる学派間の論争史を探究することで、貨幣に対する経済学派間の見方の相違がなぜ生じるのかを明らかにしつつ、貨幣の体系的な理解を提示するものである。これは、空想的な物々交換から貨幣を導き出す通俗的理解や、MMTのような国家紙幣論の弱点をただす基礎理論となる。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study is to present a systematic understanding of contemporary monetary theory through the controversial history of money of account. The research results were presented in three areas: (1) a historical study of the theory of money of account based on the Birmingham school, (2) clarification of the process of acceptance of the theory of money of account by Marxians and post-Keynesians, and (3) presentation of a systematic understanding of modern monetary and financial institutions. While the post-Keynesian school explains credit money in nominalist terms, the Marxian school is characterized by its emphasis on commodity economic logic through the theory of value forms. The Birmingham school's theory of money of account has also been classified as nominalist, but Enderby's theory of money of account has been shown to be original in that it questions the relationship between commodity value and labor substance.

研究分野：政治経済学

キーワード：計算貨幣 バーミンガム学派 マルクス学派 ポスト・ケインズ学派 商品貨幣 国定貨幣 管理通貨制 金本位制

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

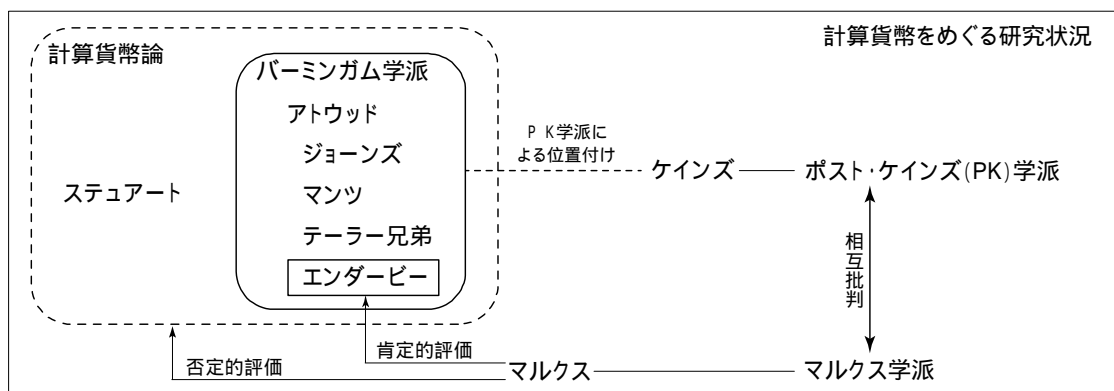
1. 研究開始当初の背景

現代の貨幣市場では、中央銀行の非伝統的な金融政策が実施され、ビットコインのような仮想通貨が登場している。20世紀に見られた管理通貨制度への移行に続いて、貨幣制度が大きく変容を遂げている。こうした21世紀の貨幣現象を理解するためには、実物主義的な貨幣論の形成史を批判的に振り返り、その反省の契機としての「貨幣とは何か」という根本的な「問い」がいま一度提起されなければならない。この問いを解く鍵が、計算貨幣論の理解の仕方にある。

ナポレオン戦争に伴うイングランド銀行の兌換停止期は現代の金融制度に類似する状況にあったと考えられる。古典派が金本位制への復帰を主張したのに対し、計算貨幣論という観点から不換銀行券制度を積極的に支持して当時ほとんど顧みられることのなかったバーミンガム学派の知見はむしろ先駆的なものであったといえよう。計算貨幣論とは、貨幣の本質を金のような実物ではなく会計上の計算機能に見いだす貨幣学説とされているが、現代の経済学におけるその理解は錯綜しており、体系的に把握することが困難な状況にある。したがって、「計算貨幣をめぐる論争史」を再構成する必要がある。

現在、計算貨幣論は多様なアプローチで研究が進められている。第1に、ステュアート(Steuart, J.)に代表される計算貨幣論の学史的な研究である。第2に、バーミンガム学派をケインズの管理通貨論の先駆と位置づけ、計算貨幣論を積極的に継承するポスト・ケインズ学派の研究である。第3に、結城、泉、江原によるマルクス学派の計算貨幣論の取扱いの見直しである。

ステュアートの計算貨幣論はよく知られているものの、アトウッド(Attwood, T.)に代表されるバーミンガム学派が1797年のイングランド銀行の兌換停止を受けて計算貨幣論をより具体的に展開している点については看過されがちである。加えて、3つの計算貨幣論研究は相互に独立して進められており、十分に関連づけられていない。本研究の学術的背景には、以上のような計算貨幣論研究のアンバランスさと、異なる学派間の関連性の不足とがある。こうした研究状況を糾すことなしに、「計算貨幣とは何か」という問いが解決することはない。



2. 研究の目的

本研究の目的は、やや錯綜した感のある「計算貨幣論をめぐる論争史」を3学派の再読を通じて再構成し、不換銀行券制度を理解するための分析枠組みを体系的に把握することである。計算貨幣論研究の蓄積のある3名の共同研究を基礎として、歴史的に長期にわたる論争史を緻密な文献考証によって裏付けながら体系化する。

先行研究に照らした本研究の学術的独自性と創造性は、以下の3点にある。

第1に、これまで十分究明されていなかったバーミンガム学派の史的展開過程を明らかにする。

第2に、計算貨幣論をめぐる論争史が錯綜してきたことの原因が計算貨幣論の受容過程にあることを解明し、マルクス学派とポスト・ケインズ学派によって敷衍された通説的な計算貨幣論理解に再考を促す。

以上の総合を通じて、第3に、現代の金融現象の認識を深め、「計算貨幣とは何か」という問いに答えるためには、計算貨幣論の体系的な把握が必要であることを示す。

3. 研究の方法

(1) バーミンガム学派を基点とする計算貨幣論の学史的考察

西沢保『異端のエコノミスト群像』(岩波書店, 1994年)はバーミンガム学派に結集する1820-40年代の経済政策思想を扱っている。代表的論者はジョーンズ(Jones, C.), マンツ(Muntz, G. F.), テーラー兄弟(John & James Taylor), エンダービー(Enderby, C.)等々である。本研究は、西沢(1994)に切り開かれたバーミンガム学派の多様性の理解を基礎としつつ、<バーミンガム学派 - マルクス学派 - ポスト・ケインズ学派>をつなぐ輪としてアトウッドとエンダービーに注目する。

そのために研究代表者は、バーミンガム学派の各論者の所説を徹底的に調査する。西沢(1994)によって各論者の概要と基礎文献の目録が得られるが、アトウッド - エンダービー関係のよう

に未着手の領域も少なくない。とくにエンダービーの初期文献については入手困難なものがある。パーミンガム学派の活動実態と理論展開を的確に把握するためにはパーミンガム政治同盟、パーミンガム商工会議所、産業解放協会、反金本位法同盟等々の発行した機関誌・書簡、並びに議会資料等々の調査が不可欠である。そこで、ロンドン、パーミンガムの図書館・資料館にて文献の収集を行い、一次資料に裏付けられた精緻な分析を行う。収集した資料の読み込みを通じてパーミンガム学派の展開関係を整理し、内的な展開を他学派からみたときの受容のされ方に着目して捉え直し、研究分担者が進めている研究に接合する。

(2) マルクス派およびポスト・ケインズ派による計算貨幣論の受容過程の解明

研究分担者(江原)は、日本におけるポスト・ケインズ学派とマルクス学派の計算貨幣論研究の到達点を整理する。

研究分担者(泉)は、ポスト・ケインズ学派の信用貨幣論の構造を解明した研究、並びに、信用貨幣論に関する研究代表者との共同研究を土台にして、ポスト・ケインズ学派の信用貨幣論に対する計算貨幣論の貢献を整理しつつ、マルクス学派の横断的なサーベイに取り組み、計算貨幣論をめぐる現代的な論争状況の整理作業を進める。

(3) 現代の貨幣・金融制度の体系的理解の提示

研究分担者(江原)が、金融論と計算貨幣論の領域横断的な理論研究を進め、現代の金融現象に対する説明能力を吟味する。

研究代表者・研究分担者らは、それぞれが進める学史研究と理論研究を総合し、計算貨幣論を軸とした現代の貨幣制度の体系的理解を協力して提示する。研究代表者の学史研究を軸として、パーミンガム学派からマルクス学派、ポスト・ケインズ学派に至る経済学説の展開・受容過程の理解に基づき、計算貨幣論をめぐる論争史を再構成する。かくして、計算貨幣とはどのようなものとして提起され、どのように理解され、そして現代にいかなる意義を持つのか、包括的な理解が得られると期待しうる。

4. 研究成果

(1) 研究方法の(1)で示したように、パーミンガム学派の計算貨幣論の体系的な研究を進めるためには、ロンドン、パーミンガムの図書館・資料館を訪問しなければならないが、コロナ禍の状況が改善しなかったため、調査を実施することができなかった。そのような状況下でも、初期から後期にかけてのエンダービーの資料については網羅することはできなかったものの、ほぼ入手することができたため、エンダービーの計算貨幣論を明らかにすることに集中した。

研究代表者は、『マルクス経済学：市場理論の構造と転回』(桜井書店、2021年)に所収の論文「C. エンダービーの経済学説 計算貨幣論、倉庫銀行論、固定貨幣論」において、パーミンガム学派のエンダービーが学派に共通する見解であると思われる計算貨幣論を極めて特殊な方法で導出していることを明らかにした(結城剛志「政府紙幣論の理論的根拠 エンダービーの所説によせて」、杉並経済学研究会、東京経済大学、2018年8月7日)。

すなわち、多くの計算貨幣論では、経済計算のための必要から計算貨幣を所与として、信用貨幣論や政府紙幣論を展開するのに対して、エンダービーの場合は、一般的には計算貨幣論と整合しないと考えられているスミスの二重一致問題から始め、物々交換の困難を解決するための手段としての貨幣と、価値尺度としての貨幣を導いている。その際、物々交換で求められるのは商品の使用価値ではなく、商品の価値または交換力であるとされ、価値に対する請求権としての債務証券が引き出される。この価値を数で表したものが計算貨幣であり、その大きさは労働量によって与えられる。計算貨幣論は、実体的なものとの関係を切り離す名目主義の文脈に位置づけられるのが通例であるが、エンダービーの計算貨幣は労働実体に強く結びつけられた解釈となっている。こうして交換過程から信用貨幣を引き出し、債務証券に対する資産価値を潤沢に担保する倉庫銀行が提示されるのである。政府紙幣論は、国家の権力や権威に基づくものではなく、むしろ租税担保証券であると位置づけられる。

もっとも、金本位制が銀行券の発券量を制限し、貨幣の不足によって過少消費型の恐慌が生じるとの見解は、パーミンガム学派のアトウッドと共有されている。初期のエンダービーの所説は、兌換停止期の物価、雇用、賃金の動向から、不換銀行券制度の安定性を実証し、同時に、スミスと同様の問題設定から金貨幣論に収束しない信用貨幣論と計算貨幣論を導くことで、不換化に実証的・理論的な基礎を与えようとしたものであると評価しうる。

(2) マルクス学派の貨幣論の基礎理論である価値形態論は、日本で最も研究が先行している。その研究状況と現在の到達点とについて、ポスト・ケインズ学派によって提示された計算貨幣論も参照しつつ整理した(泉正樹「商品貨幣論の現代的展開」『季刊経済理論』第55巻第4号、2019年、7-17頁、査読あり)。そこで確認された論点を踏まえた上で、近年の計算貨幣論とも共有しうる、価値の量的表現が価値形態論の基本課題であることを示した(EHARA, K. "Expressing Value Quantitatively: Revisiting Kuruma-Uno Debate", SSK Invited Talk for Postcapitalism and the Innovation of Marxism, オンライン開催、2020年12月2日)。また『マルクス経済学：市場理論の構造と転回』に所収されている論文(江原慶「価値の知覚の比較学」)では、商品の価値を表現する価値形態論の枠組みに対して、歴史的・制度的な文脈を考慮

することで、国内の貨幣単位の決定と国際通貨体制の決定の同時性を分析する必要性を指摘した。同じく『マルクス経済学：市場理論の構造と転回』に所収されている論文（泉正樹「価値形態と現代の不換銀行券制度」）では、価値物としての金貨幣を事前に論定し、そこから信用貨幣を展開するマルクス以来の理論構成によっては、兌換制から不換制への貨幣制度の歴史的発展を理論的に捉えることはできないと論じた。

これらの研究から『経済学批判』（1859）のマルクスがエンダービーを高く評価した背景には、マルクス価値形態論が未完成であり、価値実体的な観点を色濃く残していたことで、計算貨幣論に対する理論的な評価が十分なしえなかったことがあるのではないかと推察しうる。『資本論』（1867）で、価値形態論が十全に展開された後には、計算貨幣論に対する評価はいっそう複雑にならざるをえないだろう。バーミンガム学派は、貨幣論と貨幣制度論とを地続きで論じていたため、理論的な精緻化や体系性に限界があったとはいえ、貨幣がそれ自身で成り立つものではなく、歴史的・制度的な背景や国際的な通貨体制の枠組みの中で成り立っていることを意識した理論展開になっていたという点で先見性があったといえよう。

(3) 現代の金融制度の特徴は、在庫が充満している一般市場と異なる、取引所型市場の特性を切り出すことで捉えうることが明らかになった（江原慶『資本主義的市場と恐慌の理論』日本経済評論社、2018年、260頁；江原慶「商品の同種性と商品債務」『大分大学経済論集』第71巻第2,3,4号、2019年、1-37頁、査読あり）。それとともに、現代の金融現象を形容する「金融化」は、銀行を中心とした分析を要請しているとともに、銀行業を適切に理論化するための資本概念の再構築が必要となっていることを明らかにした（江原慶「資本の変容と「金融化」：清水真志の「貨幣資本家」再考論によせて」『大分大学経済論集』第70巻第5・6号、2019年、33-67頁、査読あり；江原慶「銀行業と資本：分化・発生論批判」『歴史と経済』第244号、2019年、1-17頁、査読あり）。

さらに、日本の金融論研究史を振り返り、それを資本主義の歴史的発展理解に応用し、日本の金融論研究が現代の資本主義における金融現象を歴史的に分析しうることを示された（EHARA, K. “The Crisis Theory and the Stages Theory in the Uno School”, Marx-Engels-Jahrbuch 2017/18, 2017/18, 2018, pp. 245-252, 査読なし；EHARA, K. “Kozo Uno’s Theory of Commercial Capital”, the SSK 6th Research Seminar, Seoul: Sogang University, May 26, 2019；EHARA, K. “What is Commercial Capital?: Japanese Contributions to Marxian Market Theory”, Historical Materialism Annual Conference, London: London Univ. SOAS, Nov. 10, 2019, Joint with Shinya Shibasaki）。

その一方で、マルクス経済学の貨幣論を基礎付けてきた価値形態論を再考し、これが有体物としての貨幣を導出する平板な貨幣論ではなく、知覚し得ない経済的価値をいかに知覚するか、という、あらゆる貨幣の姿に共通する一般理論であることを確認した（『マルクス経済学：市場理論の構造と転回』；泉正樹「不換銀行券と商品価値の表現様式（3）：現代の不換銀行券制度と資本主義の歴史展開」『東北学院大学経済学論集』第191号、2019年、33-56頁、査読なし）。

これらの成果を踏まえ、歴史的に発展する資本主義を理論的に捉える方法について考察を進めた（泉正樹「マルクス経済学の基礎理論を今日において学ぶ意味」、2018年度第43回社会思想史学会大会セッション報告（N 18・9世紀ドイツの社会経済思想）、東京外国語大学府中キャンパス、2018年10月28日；泉正樹「『グローバル資本主義の変容と原論』の論点」、SGCIME夏季研究会、オンライン開催、2020年9月6日；泉正樹「資本主義の歴史的発展と経済原論：「変容論的アプローチ」からの展開」『東北学院大学経済学論集』第194・195号（合併号）、2021年、35-57頁、査読なし）。さらにポスト・ケインズ派の利子論を包摂し、貨幣と資本の関係性を抜本的に組み替えた。これまでの貨幣から資本を導出する理論構成に替え、貨幣と資本が相補的に成立する変容論的な理論構成を提示した（江原慶「資本による貨幣の変容」、『季刊経済理論』特集論文研究会、オンライン開催、2021年3月7日）。

商品経済的論理から演繹的に説明される商品貨幣・信用貨幣と、それとは整合的に説明できない計算貨幣との関係は、『これからの経済原論』（ばる出版、2019年）で体系化し、初学者でも理解できるように工夫して説明した。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計15件（うち査読付論文 10件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 6件）

1. 著者名 Kei Ehara	4. 巻 Vol. 71, No.1
2. 論文標題 Rethinking Imperialism: A Provisional Reappraisal of Kozo Uno's Critique of Imperialism	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 Oita University Economic Review	6. 最初と最後の頁 1-17
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 江原慶	4. 巻 第244号
2. 論文標題 銀行業と資本：分化・発生論批判	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 歴史と経済	6. 最初と最後の頁 1-17
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 江原慶	4. 巻 第71巻第2,3,4号
2. 論文標題 商品の同種性と商品債務	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 大分大学経済論集	6. 最初と最後の頁 1-37
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 江原慶	4. 巻 第16巻第4号
2. 論文標題 宇野弘蔵の商業資本論（韓国語）	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 マルクス主義21	6. 最初と最後の頁 143-156
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 結城剛志	4. 巻 第120巻第1号
2. 論文標題 アナザー・マルクス 21世紀のマルクス研究の地平	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 経済学雑誌	6. 最初と最後の頁 13-35
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 泉正樹	4. 巻 第44巻
2. 論文標題 マルクスの労働論：マルクス経済学の基礎理論の視座から	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 ロバート・オウエン協会年報	6. 最初と最後の頁 47-59
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 江原慶	4. 巻 第61巻第1号
2. 論文標題 帝国主義論の盛衰：宇野理論の視座から	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 歴史と経済	6. 最初と最後の頁 20-29頁
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 江原慶	4. 巻 第70巻第5・6号
2. 論文標題 資本の変容と「金融化」：清水真志の「貨幣資本家」再考論によせて	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 大分大学経済論集	6. 最初と最後の頁 33-67頁
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Kei Ehara	4. 巻 Vol. 9, No. 3
2. 論文標題 From Classical Market View to Marxian Market View: Reinterpreting the Theory of Market Value	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 World Review of Political Economy	6. 最初と最後の頁 pp. 387-409
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.13169/worlrevipoliecon.9.3.0387	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Kei Ehara	4. 巻 2017/18
2. 論文標題 The Crisis Theory and the Stages Theory in the Uno School	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 Marx-Engels-Jahrbuch 2017/18	6. 最初と最後の頁 pp. 245-252
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 泉正樹	4. 巻 第55巻第4号
2. 論文標題 商品貨幣論の現代的展開	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 季刊経済理論	6. 最初と最後の頁 7-17頁
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 泉正樹	4. 巻 第191号
2. 論文標題 不換銀行券と商品価値の表現様式(3): 現代の不換銀行券制度と資本主義の歴史展開	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 東北学院大学経済学論集	6. 最初と最後の頁 33-56頁
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 泉正樹	4. 巻 第194・195号(合併号)
2. 論文標題 資本主義の歴史的発展と経済原論:「変容論的アプローチ」からの展開	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 東北学院大学経済学論集	6. 最初と最後の頁 35-57頁
掲載論文のDOI(デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Kei Ehara	4. 巻 Jan
2. 論文標題 Reconstructing Marxian Theory of Ground Rent: Based on Japanese Development of Marxian Political Economy	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 Political Economy and Economics History Society Working Paper Series	6. 最初と最後の頁 pp.1-15
掲載論文のDOI(デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 江原慶	4. 巻 Vol.17, No.4
2. 論文標題 価値の量的表現論(韓国語)	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 マルクス主義研究	6. 最初と最後の頁 70-104
掲載論文のDOI(デジタルオブジェクト識別子) 10.26587/marx.17.4.202011.004	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

[学会発表] 計26件(うち招待講演 4件/うち国際学会 5件)

1. 発表者名 Kei Ehara
2. 発表標題 Kozo Uno's Theory of Commercial Capital
3. 学会等名 the SSK 6th Research Seminar, Seoul: Sogang University(招待講演)(国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 江原慶
2. 発表標題 価値の知覚の比較学
3. 学会等名 経済学史学会第83大会, 福岡大学
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 江原慶
2. 発表標題 経済学部の独立とアカデミズム: マルクス経済学の立場から
3. 学会等名 政治経済学・経済史学会春季総合研究会, 東京大学
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Kei Ehara (Joint with Shinya Shibasaki)
2. 発表標題 What is Commercial Capital?: Japanese Contributions to Marxian Market Theory
3. 学会等名 Japanese Society of Political Economy, Tokyo: Komazawa Univ. (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Kei Ehara (Joint with Shinya Shibasaki)
2. 発表標題 What is Commercial Capital?: Japanese Contributions to Marxian Market Theory
3. 学会等名 Historical Materialism Annual Conference, London: London Univ. SOAS (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 結城剛志
2. 発表標題 オルタナティブとマルクス経済学
3. 学会等名 経済理論学会第7回若手セミナー，駒沢大学（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 結城剛志
2. 発表標題 貨幣改革の狂騒 戦間期アメリカの事例から
3. 学会等名 マルクス理論研究会，東京大学
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 泉正樹
2. 発表標題 価値形態と現代の不換銀行券制度
3. 学会等名 経済学史学会第83回大会，福岡大学
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 泉正樹
2. 発表標題 マルクスの労働論：マルクス経済学の基礎理論の視座から
3. 学会等名 ロバート・オウエン協会第170回研究集会，主婦会館プラザエフ（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Kei Ehara
2. 発表標題 Rethinking Imperialism: Developing Kozo Uno's Critique of Imperialism
3. 学会等名 MARX200 Politics, Theory, Socialism, Berlin: Rosa-Luxemburg-Stiftung, May 3, 2018 (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 江原慶
2. 発表標題 帝国主義論の盛衰：宇野理論の視座から
3. 学会等名 2018年度政治経済学・経済史学会秋季学術大会，一橋大学，2018年10月20日
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 江原慶
2. 発表標題 資本の変容と「金融化」
3. 学会等名 マルクス生誕200年記念国際シンポジウム，法政大学，2018年12月22日（国際学会）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 泉正樹
2. 発表標題 マルクス経済学の基礎理論を今日において学ぶ意味
3. 学会等名 2018年度第43回社会思想史学会大会セッション報告（N 18・9世紀ドイツの社会経済思想），東京外国語大学府中キャンパス，2018年10月28日
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 結城剛志
2. 発表標題 政府紙幣論の理論的根拠 エンダーピーの所説によせて
3. 学会等名 杉並経済学研究会，東京経済大学，2018年8月7日
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 結城剛志
2. 発表標題 合評会『マルクス資本論』を読む
3. 学会等名 マルクス研究会，立教大学，2018年9月29日
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 結城剛志
2. 発表標題 アナザーマルクス 21世紀のマルクス研究の地平
3. 学会等名 大阪市立大学 #Marx200 記念シンポジウム，大阪市立大学，2018年11月24日（招待講演）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 泉正樹
2. 発表標題 これからの労働論についての覚書
3. 学会等名 「経済原論と現代資本主義」研究会，オンライン開催，2020年6月20日
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 泉正樹
2. 発表標題 『グローバル資本主義の変容と原論』の論点
3. 学会等名 SGCIME (マルクス経済学の現代的課題研究会) 夏季研究会, オンライン開催, 2020年9月6日
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 江原慶
2. 発表標題 資本による貨幣の変容
3. 学会等名 さくら原論研究会, オンライン開催, 2020年4月14日
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 江原慶
2. 発表標題 資本による貨幣の変容
3. 学会等名 東北大学大学院経済学研究科社会経済特別演習, オンライン開催, 2020年6月25日
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 江原慶
2. 発表標題 コミュニケーションと労働
3. 学会等名 「現代の社会関係と労働」研究会, 大分大学, 2020年9月28日
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 Kei Ehara
2. 発表標題 Expressing Value Quantitatively: Revisiting Kuruma-Uno Debate
3. 学会等名 SSK Invited Talk for Postcapitalism and the Innovation of Marxism, オンライン開催, 2020年12月2日
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 江原慶
2. 発表標題 今井慧仁報告「価値形態論の原理論的再構築」コメント
3. 学会等名 経済理論学会第68回大会, オンライン開催, 2020年12月12日
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 江原慶
2. 発表標題 資本による貨幣の変容
3. 学会等名 国際金融開発経済研究会, オンライン開催, 2020年12月22日
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 泉正樹
2. 発表標題 価値形態と現代の不換銀行券制度
3. 学会等名 「経済原論と現代資本主義」研究会, オンライン開催, 2021年3月23日
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 江原慶
2. 発表標題 資本による貨幣の変容
3. 学会等名 『季刊経済理論』特集論文研究会，オンライン開催，2021年3月7日
4. 発表年 2021年

〔図書〕 計5件

1. 著者名 さくら原論研究会（泉正樹、江原慶、柴崎慎也、結城剛志）編	4. 発行年 2019年
2. 出版社 ばる出版	5. 総ページ数 220
3. 書名 これからの経済原論	

1. 著者名 江原慶	4. 発行年 2018年
2. 出版社 日本経済評論社	5. 総ページ数 260頁
3. 書名 資本主義的市場と恐慌の理論	

1. 著者名 マルチェロ・ムスト（江原慶、結城剛志、共訳）	4. 発行年 2018年
2. 出版社 堀之内出版	5. 総ページ数 506頁
3. 書名 アナザー・マルクス	

1. 著者名 マーガレット・G・マイヤーズ（結城剛志訳）	4. 発行年 2018年
2. 出版社 ばる出版	5. 総ページ数 240頁
3. 書名 社会改革のための貨幣上の諸提案：ゲゼル、ソディ、ダグラスの理論と実践	

1. 著者名 SGCIME編（泉正樹，江原慶，結城剛志，他5名）	4. 発行年 2021年
2. 出版社 マルクス経済学：市場理論の構造と転回	5. 総ページ数 280
3. 書名 桜井書店	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	江原 慶 (Ehara Kei) (20782022)	大分大学・経済学部・准教授 (17501)	
研究分担者	泉 正樹 (Izumi Masaki) (90517038)	東北学院大学・経済学部・教授 (31302)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------